

# 日本手話における強調表現

佐藤 美智子

## 1. はじめに

手話は言語であると明言されるようになったのはごく最近のことである。2011年に改正された障害者基本法の中によりやく「言語（手話を含む。）」と明記された。国連においても手話言語が音声言語と対等であることが認められた。さらに、研究の歴史は浅く、50年ほど前から研究者が手話を言語として取り上げるようになったが、いまだ、日本手話（以下、単に「手話」とする）は言語として十分に記述されているとは言えない状況である。手話の記述が進まない要因にはいくつか考えられるが、その一つに、手話が手指による記号のみならず「非手指表現」と呼ばれる手指以外の要素が意味上重要な役割を果たしていることがあげられる。「非手指表現」とは、眉（上げ・寄せ）、頬（ふくらみ・すぼめ）、目（見開き・細め・視線）、舌（舌だし・動き）、あご（動き）、頭（うなずき・動き）、口（口形）、肩（広げ・すぼめ・動き）などである（松岡2015など）。「非手指表現」は、感情的な伝達のほかに文法的な機能や副詞的な意味を加えることが指摘されている。（市田・木村1993、市田・江藤2000など）。手話において、この「非手指表現」を記述することは、手話の言語としての体系を明らかにするうえで、非常に重要である。そこで、本論では、手話における副詞的な役割を果たす「非手指表現」を取り上げることとする。

### 1.1 先行研究の概要

先行研究において、手話の副詞的成分に言及したものに、米川（1984）、木村・市田（1993）、市田・江藤（2000）がある。手話における非手指表

現に関わるものには、神田・原・神谷・木村・片岡（2003）、神田（2008）、菊澤（2015）、松岡（2015）がある。

米川（1984）は手話の品詞について論じ、手話にも形容詞・副詞が認められ、かつ、日本語とは異なる特徴を持つ場合があることを指摘している。JSL（Japan Sign Language日本手話）の副詞は用言を修飾する機能をもつ。程度副詞に属する語の用法は時間や空間の名詞を修飾するときには制限が見られるとしている。ここで取り上げられているのは、主に時間副詞であり、程度副詞については述べられていない。

木村・市田（1993）は日本手話には副詞的な非手指表現があるとし、情態副詞的な非手指動作、程度副詞的非手指動作などを挙げている。情態副詞については、特定の非手指動作が動詞と同時に起こることによって、機能を果たすことも多いとし、程度副詞的非手指動作では時間的物理的近接性を取り上げて述べている。

市田・江藤（2000）は副詞的情報（様態、程度、陳述）が手指単語と共起する非手指動作（顔の表情など）によって表現されると述べ、非手指副詞を強弱表現の視点から分析している。手話における示差特徴は「形」「位置」とそれらの変化として「動き」ととらえられてきた。「強弱」は変化としての動きよりも「身体感覚」としてとらえられるものであった。あごと眉の動きには相関関係があり、同時に発生する強弱のひとつの現象である。強弱は「緊張」と「弛緩」、その中間に「制御」を加えられるかもしれない。これらに従って口型、あるいは「目を細める」が加わって、程度を強める副詞、弱める副詞、「微妙さ」を示す程度副詞が表現されるとしている。

## 1.2 問題の所在

市田・江藤（2000）では、「緊張」「弛緩」「制御」といった強弱のレベル指定があり、口型または目の開き方がこれに加わることで、程度を強める副詞になったり程度を弱める副詞となったりすると考えられている。

しかしながら、十分な記述がなされているとは言いがたい。

手話において「非手指表現」のみが副詞的な表現を担っているわけではない。手指による手話単語においても形容詞を修飾する副詞相当の単語はある。また、日本語における副詞的表現を扱った仁田（2002）、工藤（2016）によれば、〈程度性〉とは、属性や状態にかかわるものであり、そこには様々なレベルや段階性が存在する。「とても」などのように幅広く程度副詞として使えるものもあれば、特定の程度しか表さない副詞もある。よって、さまざまな属性や状態を考慮してどのような程度強調副詞が用いられるのかをみる必要があると考えられる。

そこで、本論では、程度副詞「とても」に対応する程度強調表現について、日本語に即した表現ではなく、身近なろう者が日常で使う自然な手話においてどのような表現があるかを探り記述することを目的とする。

## 2. 方法

まず調査の概要について述べる。

### 2.1 調査対象

手話を第一言語として身に付けていると思われる、岡山県内在住の中高年層を調査対象とした。若年層は近年拡大しているインテグレーション（注1）や人工内耳（注2）の影響もあり、対象となり得る人口が急激に減少している。また、岡山県内の在住者に限定することで、一定のコミュニティの姿が見えてくると推測する。対象者の性別に関しては、特に区別しない。例文を日本語で提示するため、日本語に長けていることを考慮して人選した。上記の条件で、今回は調査対象者を10人とした。被調査者情報は表1の通りである。

表1 被調査者概要

対象者	性別	年齢	先天／後天
A氏	男	50歳代	先天ろう
B氏	女	40歳代	先天ろう
C氏	女	50歳代と推測	先天ろう
D氏	女	40歳代	先天ろう
E氏	女	60歳代	先天ろう
F氏	女	60歳代	先天ろう
G氏	女	60歳代	先天ろう
H氏	男	50歳代	先天ろう
I氏	女	60歳代	先天ろう
J氏	女	60歳前後と推測	2歳時失聴

## 2.2 調査手順

### 2.2.1 形容詞の選定

仁田 (2002) 工藤 (2016) で指摘される通り、日本語において程度副詞は主として形容詞に係る。そこで、手話においても程度表現は形容詞に係ると考える。程度副詞に係る形容詞の選定については八亀 (2008) を参考とした。八亀は形容詞を以下のようなグループに分けている。「感情」「生理状態」「知覚関係」「色と形」「大小関係など」「人の性格など」「評価」である。これを基に、大小関係などスケールを表す「大きい」「小さい」「遠い」「近い」「早い・速い」「遅い」「重い」「軽い」「広い」「狭い」「多い」「少ない」「高い」「安い」「低い」「太い」「細い」、感情表現の「嬉しい・楽しい」「悲しい」「可愛い」、知覚を表す「暑い」「美味しい」、色の「赤い」「黒い」、性格などを表す「賢い」「優しい」、評価の「良い」「悪い」の28語を取り上げた。また手話は同じ形容詞でも主語の影響を受けて別単語になることも多いので、主語を変えて表2の通り47パターンの表現を設定した。主語については、『日本形容詞辞典』と『広辞苑』によって主語になり得るものを選定した。それぞれの主語によっ

て形容詞の表現が明らかに異なるもの、基本単語と強調表現が対比し易いものを選んだ。

表2 表現形容詞のパターン

主語	形容詞	主語	形容詞	主語	形容詞	主語	形容詞
石・岩	大きい	物	重い	水かさ	多い		嬉しい・ 楽しい
石・岩	小さい	物	軽い	水かさ	少ない		
組織	大きい	気持ち	重い	値段	高い		悲しい
組織	小さい	気持ち	軽い	値段	安い		可愛い
	遠い	ホール	広い	身長	高い		暑い
	近い	ホール	狭い	身長	低い		美味しい
時間	早い	視野	広い	温度	高い		赤い
時間	遅い	視野	狭い	温度	低い		黒い
車	速い	人	多い	人	太い		賢い
車	遅い	人	少ない	人	細い		優しい
人	重い	物	多い	線	太い		良い
人	軽い	物	少ない	線	細い		悪い

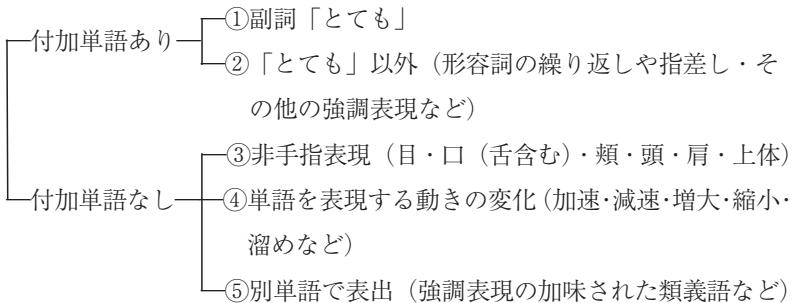
選定した形容詞に程度副詞の「とても」を付加したとき、元の形容詞を表現する手話がどのように変化するかを調べる。

## 2.2.2 調査方法

書き言葉のない手話において書面での実施は困難なため調査は対面で実施した。言語変換の調査において希望する表現内容を、別言語を使用する被験者に伝える方法として、被験者の母語を使用するか調査者の母語を使用するかは重大な課題である。本来問われる側の母語の方が表現を考え易いのは当然だが、回答を誘導してしまう危険性を回避するため、形容詞、副詞ともに日本語で提示した。調査対象単語をカードに表記し、対面で示して表現してもらおう。例えば、まず「背が高い」を示し、次に「背がとても高い」と言うときにどう表現するかを尋ねるといった手順を取る。その表現を録画して分析する。

### 3. 分析の観点

日本語の形容詞に「とても」を付加して強調したとき、手話ではどのように表現するか。日本語と同様に形容詞の前に程度副詞の「とても」に対応させた「大きい」の手話を付けて表現する方法もあるが、一般的ならう者はその表現を用いないことが多い。そこで、まず、日本語と同様に副詞相当の単語（特定の手指形態を指す）が付加されるのか否か、付加されるとすればどのような単語か（副詞「とても」に対応する単語か否か）、単語が付加されないのであればどのような表現が出るかを見ていくこととする。付加単語なしの場合には、非手指表現、単語（形容詞）を表現する動きの変化、別単語で表出の3パターンを想定する。非手指表現については先行研究の中から松岡（2015）「非手指表現には以下のようなものが含まれます。眉（上げ・寄せ）、目（見開き・細め・視線）、あご（動き）、口（口型）、頬（ふくらみ・すぼめ）、舌（舌だし・動き）、頭（うなずき・動き）、肩（広げ・すぼめ・動き）」を基に上体の動き（前後左右）、手指の動きの変化（加速・減速・増大・縮小・溜めなど）を加えて、下記の通り分類した。



別単語で表出とは、例えば日本語で「とてもはやい」を表現するときに「瞬時」というような程度性を含んだ別の単語に置き換わる場合を想定している。なお、表現時において強調の特徴が単独で現れるとは限らず、重複する場合も多分に想定できる。

以下、この観点に従って、4節で調査結果の概要を述べ、5節で付加

単語ありを、6節では付加単語なしの詳細を見ていく。次に7節で形容詞の種類によって現れる強調表現の傾向、8節でスケール大と小の形容詞による傾向を探り、9節でまとめをする。

#### 4. 調査結果の概要

まず、2節で述べた調査方法に従って調べた結果の全体像を示す。調査の結果は表3の通りである。47の例文（パターン）を10人が表現しているので、総数は470となる。しかし中に、一つの例文に対して二通りの回答をした人が4人いたため、それらを加えて総数を474とし、割合を算出するときも474を分母とした。なお、一つの例文に対して複数の手法を用いる場合があるので、1例文の中でも重複してカウントしているため割合の合計は100%を超える場合がある。474パターンのうちのどの程度出現するかの出現率を表している。

表3 形容詞の強調表現に見られた全体の傾向

付加単語あり				付加単語なし					
①とても		②「とても」以外		③非手指		④動きの変化		⑤別単語	
4	0.8%	218	46.0%	286	60.3%	352	74.3%	61	12.9%
222		46.8%		699				147.5%	

表3が示すように付加単語なしは699例で、付加単語あり222例の3倍強と圧倒的に多い。その内訳を順次見ていく。①の日本語に対応した「とても」を付加する表現は非常に少なく、4例0.8%しか見られない。②付加単語あり「とても」以外は、218例46.0%あった。③非手指は286例60.3%あり、高い使用率である。しかし、単独で出てくるわけではなく、その9割以上が②または④との併用であった。残り1割弱の内にも、⑤別単語という、それ自体に強調の意味を内包した単語と併用しているものが6割見られ、非手指のみは極わずかであった。④動きの変化は、352例74.3%を占め、最も高い使用率である。単語が付加される場合、ほとんどは「とても」以外である。かつ淡々と単語のみを表現するものはな

く、いずれも非手指表現を伴っていた。つまり、手話においては、程度副詞として「とても」を使用することは極めて少ないことがわかる。非手指表現は「②「とても」以外」の表現時にも、また付加単語なしの「④動きの変化」にも、「⑤別単語」の表現時にも付随することが多い。付加単語なし147.5%の中に占める「⑤別単語」の割合は12.9%と10分の1以下である。ほとんどを「③非手指」と「④動きの変化」で担っている。

この結果から、手話の程度表現としては形容詞に副詞相当の単語を付加しなくとも強調が可能であることが分かる。ただ、付加単語なしの中の「③非手指」と「④動きの変化」を同レベルとみることはできない。「③非手指」は「④動きの変化」と同時に発生することが多い。また「②「とても」以外」にも付随する。つまり非手指はそれだけでは成立しにくい。

次に②～⑤の項目の内容を詳細にみていく。

## 5. 付加単語あり

### 5.1 「とても」以外の内訳

次に、付加された単語の中の「とても」以外を見てみる。表現されたものを類似・同型・指さし・別物に分類した。「類似」は同義語のようなもので、形は違うが同様の意味の単語である。「同型」は全く同じ単語を繰り返している。「指さし」は対象物（者）を想定した空間を指さす動作で、指さしは基本的に代名詞である。よって概ね具体的なもので示していると考えられる。「別物」は、類似でも同型でも指さしでもない、何らかの単語が用いられているものである。

表4 ②「とても」以外の内訳

類似		同型		指さし		別物（種々）		計	
59	24.0%	12	4.9%	38	15.4%	137	55.7%	246	100.0%

結果の数字をみると「別物」が55.7%で、一見多く感じるが、これは前述の通り、さまざまな表現の集合で、一つ一つの数は大きくない。

「類似」の、類似する単語を並べるものは例えば次のようなものがみら



れた。

『とても黒い』の場合                      \* [ ]の中は手話の動きを表している。

[髪を撫でる] + [掌を硯に見立てて墨をする]

「黒・黒い」                      「黒・黒い」

共に「黒い」という意味の表現で、単独では一般的に前者を表現することが多いが後者も単独で「黒」と使う人もある。この二つが連なって黒を強調している。このとき、日本語の堪能なろう者は口形が『真っ黒』となっている。

『とても速い』の場合

[スピードメーターの + [広げた両手指を中央で

針が跳ね上がる]                      ぶつけて揺らす]

(瞬時・あっという間に)

「速い」                      「早い」

『とても暑い』の場合

[汗が流れる] + [額の汗を腕で拭う]

「暑い」                      「暑い」

これらは、同じ意味の単語を重ねることで強調を表していると考えられる。同じ意味の言葉の反復で強調することは日本語でも同様にみられる。また、強調の単語は付加される場合、元の形容詞の後に付くことが多い。この点は日本語の副詞が形容詞より先行して後の形容詞を修飾している点と異なる。

「同型」は4.9%と、全く同じ表現を重ねる強調表現は少ないことが分かる。「指さし」は15.4%である。例えば「車／メチャ速い／あれ（指さし）」のように最初の車を指さす状況で出てくる。指差しが付加されているものの程度を高めているのではなく、主語の強調になっていると考えられる。

「別物」には表出された形容詞が本来は片手で表現するものを、反対の手も同時に同じ動きをする、つまり両手で表現している場合もある。こ

れを同じ動きを繰り返す「同型」とは区別して「別物」に入れた。例としては「悲しい」「暑い」などがある。「悲しい」の『涙が流れる』動き、「暑い」の『汗が流れる』動きの基本は片手だが両手で動作することで程度を強めることになる。

また手話の特徴として、表現した内容に関連した心情を表す表情や身振り、単語を付加することがある。例えば、「(とても)早い・速い」の後に「あつという間」や「危ない!」、 「(とても)少ない」の後に「がっかり」や「残念」、 「(とても)多い」の後に「やった～」や「うんざり」の手話と表情が付くなどである。感情を表に出すことで元の形容詞を強調する働きをしている。これも種々の一つとして「別物」に入れた。これらは個々の想定しているものの内容によって、そのことが自分にとって良いことであったり、残念なことであったりする感情を具体的な表現として表している。形容詞と直接関係のない表現が多く、対象物の形状、心情を表す表情や身振りである。

また付加された別物の中には不特定の形容詞に係る強調単語（日本語の名前がない場合もある）も見られた。不特定の形容詞に係る強調単語については、その適用範囲、使用状況把握のための二次調査を行い、以下5.2に結果を記載する。

## 5.2 「とても」以外の強調単語

別物（種々）の中に見られた不特定の形容詞に係る強調単語は「とても（大きい）」以外の程度副詞と考えられる。その中から(a)「ジャンボ・大きい」（一般的に「ジャンボ」とか「大きい」と呼ばれている。）、(b)「万」の手話表現のように4指と親指を付ける動作を複数回繰り返して、5指を「パクパク」させる（名前不明）、(c)「凄い」（5指を広げ、大きめのボールを掴むように指を曲げた形の手を、こめかみの近くで前に少し回転する。）、(d)「オーバー」（または超える）、(e)「驚き（驚いて跳び上がった様子＝ジャンプ・目玉が飛び出る様子）」、(f)「不足」、(g)「限度・最高」

の7単語をとりあげ、追加調査をした。それぞれの単語をここでは仮に(a)ジャンボ、(b)パクパク、(c)凄い、(d)オーバー、(e)驚き、(f)不足、(g)限度と名付ける。動きは下図を参照していただきたい。



### 5.2.1 強調単語の許容度

付加する強調単語の(a)~(g)がどの程度容認されているかを被調査者4人に対して調査した。調査方法は集合して意見を出し合う形をとった。普段無意識に使っている言語について改めて問われても質問が漠として

いるのではないかと考え、他者の意見に触発されて思いつくことも想定した。結果は表5に示されるようにほとんどが自分も使うと容認している。

表5 強調表現の容認状況

	(a)ジャンボ	(b)パクパク	(c)凄いい	(d)オーバー	(e)驚き	(f)不足	(g)限度
B氏	○	○	○	○	○	○	○
E氏	○	○	○	○	○	○	○
F氏	○	△	○	○	○	○	○
I氏	○	△	○	○	○	○	○

※ ○…自分も使う  
 △…自分は使わないが他に使う人もいる  
 ×…かなり変

(b)パクパクで半数の2人が自分は使わないとしながらも他者に使用者があることを認めている。「知らない」や「認められない」とした意見は皆無であった。このことからこの7単語は一般的に強調単語として容認されているものと確認した。

### 5.2.2 強調単語の使用状況

次に、7単語が、形容詞の前につくか後ろにつくか、どのような形容詞に用いることができるかを調査した。その結果が表6である。

表6 「とても」以外の強調単語の付加状況

強調表現 (名詞)+形容詞	(a)ジャンボ	(b)バクバク	(c)凄い	(d)オーバー	(e)ビックリ	(f)不足	(g)限度
石・岩 大きい	●○◎	○○	●●◎	○○◎	●○◎		○●◎
石・岩 小さい		○			●		
組織 大きい	●	○	●●	◎	●○		○◎
組織 小さい		○				○◎	
遠い		○○	●○◎	○●	●		○○
近い		○○	●	○	●		
時間 早い		○	●◎	○○	●◎		○
時間 遅い				○○	●		
車 速い		○	●◎	○	●◎		○
車 遅い		○		○	●		○
人 重い	●○	○○	●●	○○◎	●◎		○○
人 軽い		○○			●	○◎	○
物 重い	○◎	○○	●●◎	○○◎	●◎		○○◎
物 軽い		○○			●	◎	
気持ち 重い		○	●				
気持ち 軽い		○			●		◎
ホール 広い	○	○	●○	○○	●○◎		○○◎
ホール 狭い		○		○	●		
視野 広い		○○	●				○
視野 狭い		○○		○	●	◎	
人 多い	○	○	●◎	○○◎	●○◎		○●
人 少ない		○			●	○○◎	○
物 多い	◎	○	●	○○	●○◎		○●
物 少ない		○			●	○○◎	
水かさ 多い	○	○◎		○○	●◎		○
水かさ 少ない		○				○○◎	
値段 高い		○○◎	●	○○	●○◎		○○◎
値段 安い		○○	●	○	●◎		●
身長 高い	●○○	○◎	●	○	●◎		○●
身長 低い		○			●	◎	
温度 高い		○◎	●◎	○○◎	●		○●◎
温度 低い		○					
人 太い	●○○	○◎	●	○○	●○◎		○●
人 細い		○	●	○○	●		●
線 太い	○	○		○			
線 細い		○					
嬉しい・楽しい		○○	●◎	○			●
悲しい		○		○			●
可愛い		○	●○	○	●		●
暑い		○○	●◎	○	●		●◎
美味しい		○○◎	●◎	○	●		○●◎
赤い		○○	●◎		●◎		◎
黒い		○○	●◎		●◎		
賢い		◎	●○◎	○	●◎		○●◎
優しい		○	●	○○			●◎
良い		○	●◎	○	●※		●◎
悪い		○△	●	○※○◎	●※◎		○※●

○：後接する ●：前接も可能 ◎：基本は後接だが感情を伴う場合は前に表現することもある ※ 内容による

質問の方法は一覧表に記入する形で回答をもらった。対象者4人に質問を向け、3人からの回答を得た。この表から見えてくるものは個人的な癖のような面もあるが、共通項もある。強調表現は全体的に程度大に付きやすく程度小に付くことは少ない。

(a)ジャンボは、石・岩が大きい、組織が大きい、人が重い、物が重い、ホールが広い、人が多い、物が多い、水かさが多い、身長が高い、人が太い、線が太いに付加されることから、スケールの大にのみ付けられ、形あるものや物理的に大であることを表現する場合に用いることができると考えられる。したがって感情・知覚・色・性格・評価には付かないことが見て取れる。(b)パクパクはほぼ全ての形容詞に付加可能である。よって汎用性が高いといえる。しかし、3人揃っての回答が少なく2人に集中した。この表現は比較的若い、50歳以下の人に多く用いられているとのコメントもあり、40代の1人に多用が認められ、その人と親交の深いもう1人が比較的多く答えている。(c)凄い、(d)オーバー、(e)驚き、(g)限度は形容詞の分類に拘らず万遍なく分布している。(c)凄い、(d)オーバー、(g)限度は、程度大小の大に多く見られる。その他の形容詞にはほぼ付加可能だ。(e)驚きは、その状況に対して驚きや意外性を感じたときに出てくるもので、程度の大小に拘らず、また大小形容詞以外にも使われている。例えばそれが色であっても、「想像以上に真黒い」とか「見事な赤だ!」というような場合には使える。(f)不足は文字通り足りていないとか極端に少ない状況に使われている。(a)ジャンボと対照の位置に丸印が付けられていることから、相反する強調語となるものと捉えられる。

次に被修飾形容詞の前に接続するか後ろに接続するかの前後関係についてみる。(b)(d)(f)はほぼ後接する。(c)と(e)は、接続するほとんどで前後接可能と出ており、(a)(g)は約半分に認められる。なお(a)(g)には人による使用状況の違いも見えてくる。表の中で○と●以外に◎を使用した。これは解答用紙への記入は全て○であったため、個別に再確認したところ、「感情が含まれる場合には前に付くことがある」との回答であった。

その際に対象物に視線を向けるなり指差しをした状態で強調表現を出し、その後形容詞が現れるとのことであった。これは感嘆詞と捉えるのが妥当かも知れない。感嘆詞か副詞かの判別は難しく、別の研究を待ちたい。

### 5.2.3 強調単語のまとめ

強調単語として挙げた7つの単語について、5.2.1で全般的にろう者にとっては日常的に使われていることが明らかになったが、聴者が強調単語として付加している場面は少ない。どのような場面で使われるのか、どのような条件が付けられるのかなどの使用状況を問うた。回答と表6から読み取った結果も合わせてまとめた使用状況が表7である。

表7 強調単語の使用状況

	使用例	使用不可例
(a)ジャンボ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形あるもの、物理的に質量のあるものに対して付く</li> <li>・想像を超えたとき</li> <li>・程度大にのみ使用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形のないもの（長さなど）</li> <li>・抽象的な内容</li> </ul>
(b)バクバク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物・人に対して</li> <li>・これ以上の不快はない</li> <li>・これ以上生意気な奴はいない</li> <li>・ほぼ何にでも付けられる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・めったに使うことはない</li> <li>・面と向かって表すことはあまりしない(見えないようにこっそりと) ⇒好ましくないニュアンスで</li> </ul>
(c)凄い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・程度大に</li> <li>・感情を伴うとき</li> <li>・前に付く場合、対象物に視線や指差しを向けて、それに対して「凄い」と出す</li> </ul>	
(d)オーバー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「あり得ない」との思いのとき</li> <li>・やり過ぎの場合</li> <li>・想定ラインを大きく超えたとき</li> </ul>	
(e)驚き	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被修飾語に左右されるより、その状況に驚いた時に出る</li> </ul>	
(f)不足	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物理的にとても少ないとき</li> <li>・期待外れのとき</li> </ul>	
(g)限度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一番良いまたは悪い</li> <li>・限度を超えているとき</li> <li>・程度大も程度小も使用可</li> </ul>	

それぞれの単語について見てみる。(a)ジャンボは地域性があると考えられる。他地域で手話を習得した自分にとっては馴染みのないものだったが、この地方では聴者にもこの表現は比較的知られている。ジャンボまたは大きいと呼ばれている。同じ動きで「もうダメ・どうにもならない」というニュアンスの表現がある。ろう者の説明ではそれも存在するがそれとは表情が異なるとのことである。

(b)パクパクはあまり堂々とあからさまに表現できるものではないというニュアンスの説明があった。そういう表現は講習会で教えるには相応しくないかも知れない。そのせいばかりでなく、これも地域性を帯びているのか、今まで目にしたことがなかった。しかしその存在を否定する意見はなく、自分では使わないまでもそういう表現があることは周知されているようだ。

(c)凄いは前述の通り、後ろだけでなく前に付くこともある。しかし説明にもあるように、「対象物に視線を向けて」ということは、指さしと同様に視線で物事を指しているので、代名詞的な働きをしている。その場合それに続く「凄い」は形容詞となる。「○○は凄い。とても速い（手話では「とても」と「速い」の語順が逆になる。）」という解釈も可能ではないか。前述した感嘆詞という可能性もある。そうなると形容詞の前に接続しているとは言えず、二文になる。手話の句読点は、極微妙な間と首振りなどで表現され、個人差も大きく、判別が難しい。かつ手話の品詞が明確にされていない現段階では、日本語の品詞で考えるしかなく、確たることが言えない。この真偽については更なる探求が必要と思う。

(d)オーバー、(e)驚き、(f)不足はいずれもその状況に対しての話者の感情が込められている。感情の付加については前にも触れたが、ここでは「そういう感情が沸くほど『とても○○』」と解釈できるのではなからうか。

(g)限度は良くも悪くも極まれる状態を示している。一般的に非利き手の掌で限度のラインを作り、利き手をそこまで移動して指先をぶつける。上に限度のラインがあれば、そこにぶつかることで最高を示し、下のラ



インにぶつかれば最低のイメージを持つが、必ずしもそれに拘らず、下  
 にぶつかっても程度大の強調を示す場面が見られた。つまり極限と理解  
 すべきだろう。興味深い場面であった。

なお、(a)ジャンボと(b)パクパクの地域性についての確認調査を行った。  
 それぞれの表現について東京と新潟のろう者、通訳者10人程度に質問し  
 た結果、全て「知らない」「見たことがない」との回答を得た。使われて  
 いない地域を関東甲信越とくくれるかどうか、使用している地域を岡山  
 県とくくれるかどうかは明言できない。使用地域の限定は改めての全国  
 調査が必要になるが、少なからず地域性はあるものと確認できた。

これまで「とても」以外の強調単語について説明を受けたことはなく、  
 会話の中から理解してきた。これらの意味を考え言語化することで理解  
 が深まると考える。

## 6. 付加単語なし

### 6.1 非手指表現の内訳

次に付加単語なしについてみる。表3で見た通り、付加単語なしを二  
 分するほど多くを占めている「③非手指」と「④動きの変化」のうち「③  
 非手指」の中を目・口（舌を含む）・頬・頭・肩・上体の項目に分けてど  
 の部分が用いられているか観察した。表3では、「非手指」は286の形容  
 詞に使用されていた。ここでは、複数の項目が一つの形容詞に同時に用  
 いられる場合をそれぞれ1カウントとしたところ、全部で490回の使用が  
 認められた。表8のパーセンテージは、「非手指」の全用例数490例に対  
 する割合である。

表8 「③非手指」の内訳

目		口・舌		頬		頭		肩		上体		計	
158	32.2%	203	41.4%	11	2.2%	46	9.4%	8	1.6%	64	13.1%	490	100.0%

顔の表情を作る重要な部分である目158例32.3%と口・舌203例41.4%  
 の割合が群を抜いている。目は、大きく見開く・細める・瞑るなどの動

きや、遠くを見たり近くを見たりする視点の距離、視線の方向などがある。口形は日本語のままに動くときや言葉に含まれる母音の口形や感嘆詞の口形などが表現される場合、口を尖らせたり真一文字に結んだりする場合がある。また今回は舌の項目を別建てにしなかったが、舌の動きも重要なものがある。口を少し開き、その間に舌が軽く盛り上がったように見せる独特の表情は乏しい状況を表す。今回3人から9例が見られた。特に両親がろう者である1人からは5回表出されている。

上体の動きは「前後左右への傾き」だけでは説明し切れない身体の表情がある。後ろへ身を引く、反り返る、前に屈む、乗り出す、横に身を引く、身をよじるなどがある。頬を膨らませたりすぼませたりすることも割合では多くないがかなり見られた。言葉によって使用の可不可はあるが、概ね程度が大になれば膨らみ、小になればすぼめている。

非手指表現の存在意義について、強調単語を調べた二次調査での4人の回答は全員一致で、「非手指表現を伴わなければ強調は不可能」とのことだった。例えばよく言われるのが、ボードの後に隠れて、手だけを前に出して手話表現をした場合、読み取れる割合が格段に下がるという話がある。「手話」すなわち「手で話す」と捉えられがちだが、非手指表現である顔や身体の表現が隠されると意思が伝えられないことを示している。

## 6.2 動きの変化

「付加単語なし」の多くを占めたもう一方で、表3の中でも一番多かった「④動きの変化」を見てみる。これは表現した形容詞そのものの手指の動き方に変化の見られたものである。単語表現の動き方に変化を付けることで強調表現がされている。すなわち元の単語の原型は保たれている。表現の加速・減速・増大・縮小・動き初めの溜めの側面から見た。表3では352例の形容詞に「動きの変化」が用いられているが、1つの形容詞の動きが増大かつ加速のように複数用いられる場合がある。その場

合は、それぞれ1カウントとした。その結果、「動きの変化」は合計505回用いられていた。その結果をまとめたものが表9である。パーセンテージは「動きの変化」全505回に対して占める割合である。

表9 「④動きの変化」の内訳

加速		減速		増大		縮小		溜め		合計	
72	14.3%	25	5.0%	249	49.3%	70	13.9%	89	17.6%	505	100.0%

加速72例14.3%に対し減速25例5.0%、増大249例49.3%に対し縮小70例13.9%と、動きの度合いを大きくする方が、明らかに数値が大きい。物事をより大きく見せようとする動きと、より小さく見せようとする動きは、大きくする方がより自然に表現できるものとする。また動きの変化もさることながらその動きを始めるにあたって「溜め」があることが分かった。89例17.6%という数値は軽視できない。溜めによって、より強調する効果が出る。言い方を変えれば、より強調しようとするならば自然と溜めて、勢いをつけて動き始めることになる。市田・江藤（2000）においても「緊張した手指運動（運動の始点での静止）」（p17）と表記されている。

### 6.3 形容詞原型とは別の表現

最後にこれまでの項目に該当しない、元の形容詞の現れない表現がある。大きく分けると二つに分類できる。一つは形容詞原型とは別の独立した強調表現が存在する場合である。もう一つは、言語変換の翻訳レベルで別の言葉を選択した場合である。一つ目の独立した強調表現は全体からみると少ない。これは単独で強調の付加された意味を示す単語の存在が稀なためである。例えば「早い」に対して「あっという間」「瞬時」のニュアンスを持つ手話がある。「美味しい」を強調した「もの凄く旨い」といったニュアンスの表現もある。また、スピード感を表現するとき、乗り物を表現し、それが速いことを示した上で補強のように「周囲の景色が後ろへと飛んでいく」手話を加えることがある。

二つ目の翻訳レベルで別の言葉を選択した場合には以下のような例がある。「狭い」を強調するとき、自分がその狭い空間に身を置いた状況で、肩を丸め身を縮めて、その狭さを表現する。「(人が)多い」を「混み合う」で強調表現する。「良い」の強調を「素晴らしい」とする。「(気持ちがい)軽い」を「頭の中に何もない、空っぽ」と訳した例も今回の調査で見られた。これら翻訳による別単語の選択も少なからず基本形の形容詞に強調表現を付加したり動きを変化させたりして表現しているものではないとして、「別単語」に分類した。

## 7. 形容詞の種類別の傾向

### 7.1 種類別の出現率

形容詞の種類ごとに表現の出方を見た。形容詞種類の行の( )内の数字は、その種類において調査した形容詞の総数を示している。表中の%は、形容詞種類の総数に対する出現率を表している。

表10 形容詞の種類別の全体の傾向

形容詞種類 (総数)	付加単語あり				付加単語なし					
	①とても		②「とても」 以外		③非手指		④動きの変化		⑤別単語	
大小 ( 362 )	0	0.0%	156	43.1%	204	56.4%	275	76.0%	51	14.1%
感情 ( 30 )	0	0.0%	11	36.7%	23	76.7%	23	76.7%	2	6.7%
知覚 ( 20 )	0	0.0%	9	45.0%	10	50.0%	15	75.0%	4	20.0%
色 ( 22 )	4	18.2%	17	77.3%	19	86.4%	6	27.3%	3	13.6%
性格 ( 20 )	0	0.0%	14	70.0%	16	80.0%	16	80.0%	0	0.0%
評価 ( 20 )	0	0.0%	11	55.0%	14	70.0%	17	85.0%	1	5.0%
合計 ( 474 )	4	0.8%	218	46.0%	286	60.3%	352	74.3%	61	12.9%
区分別	222 46.8%				699 147.5%					

表10で目を引いたのは、手話の「とても」を付加した、数少ない例の全てが「色」に集中していることである。②「とても」以外でも何らかの強調単語を付加する割合が77.3%と、他の種類と比べて高い割合を示し

ている。また付加単語なしの③非手指を伴っている割合も86.4%と一番多い。反対に「④動きの変化」は27.3%と一番少ない割合を示している。ここに明確な特徴が出た。「色」の名称表現には程度性がなく、「動きの変化」で強調を表現するのは難しい。敢えて強調表現を求めると、「とても」ないしは何らかの強調単語を選択する、若しくは強調のための非手指表現を伴うのではないかと考える。

続いて付加単語が多いのは「性格」で、「色」と大差のない70.0%である。ただ、「性格」の場合の付加単語は、その形容詞で形容する対象者を指す、指差し（代名詞の役割）が目立った。「性格」では「非手指」「動きの変化」ともに80.0%と多い。「非手指」が多いことは「色」と同様だが「性格」には感情も伴うため、その違いが「動きの変化」に出たと考える。感情を伴わない「色」の27.3%に比して80.0%は大きな割合である。「性格」は、付加単語、「非手指」「動きの変化」いずれも高い割合で出現している。これは「性格」の程度強調では付加単語かつ非手指や、付加単語かつ動きの変化などのように一つの形容詞に対し複数の手段が用いられる場合が多いことを示す。ほかに、「感情」と「評価」も「非手指」と「動きの変化」の両方で高い割合を示している。「性格」「感情」「評価」はいずれも話者の心理的な側面が大きく影響する形容詞である。このような形容詞では、顔の表情や身体の動きなど、より多くの手段を用いて、より感情的に程度性を強調するものと考えられる。

「⑤別単語」については、元々強調の独立単語が少ないことは先にも述べた通りで、該当する単語があるかないかに左右される面も考慮したい。従って少ない中での数値の差を評価するのは困難である。

## 7.2 形容詞の種類と「非手指表現」

続いて非手指表現は、どの部分が強調として機能しているかを形容詞の種類ごとに見る。表11下段の合計は、表8の内訳に対応している。表8と同じく、一つの形容詞に複数の項目が用いられる場合それぞれカウ

ントしているため、右端の合計の項目のパーセンテージは100%を超えるものがある。

表11 形容詞の種類別の「③非手指表現」の内訳

形容詞種類	目		口・舌		頬		頭		肩		上体		合計	
大小 (362)	114	31.5%	142	39.2%	9	2.5%	26	7.2%	6	1.7%	36	9.9%	333	92.0%
感情 (30)	15	50.0%	14	46.7%	2	6.7%	9	30.0%	1	3.3%	14	46.7%	55	183.3%
知覚 (20)	6	30.0%	8	40.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	5.0%	2	10.0%	17	85.0%
色 (22)	9	40.9%	17	77.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	9.1%	28	127.3%
性格 (20)	6	30.0%	9	45.0%	0	0.0%	8	40.0%	0	0.0%	7	35.0%	30	150.0%
評価 (20)	8	40.0%	13	65.0%	0	0.0%	3	15.0%	0	0.0%	3	15.0%	27	135.0%
合計 (474)	158	33.3%	203	42.8%	11	2.3%	46	9.7%	8	1.7%	64	13.5%	490	103.4%

格差のある中で「大小」はまんべんなく出現している。これは、大小の程度変化は目に見える形で表現しやすく、大きくも小さくも全身を使って表していることが分かる。

「感情」は全ての項目において「大小」より大きな数値が出ている。感情は表情に表れやすく、目や口に連動している「頬」や、「上体」と連動した「肩」「頭」をも動かしている。「大小」よりも更に大きな、感情豊かな身体表現になっている。

数値の低い「上体」の中で、「性格」35.0%が「感情」46.7%に次いで多い。これは「性格」の中に「優しい」の単語があり、その強調表現には優しく包み込むように上体を動かす様子が多く見られたので、それが数値に反映されたと考える。

「色」「評価」では、「口・舌」が77.3%、65.0%と他に比べ突出して高い割合を示している。「色」の具体的な動きは、色を強調するために真っ赤とか真っ黒と言ひ、口形が付いている例が多かった。日本語の堪能な被調査者であったため、日本語に傾いたと思われる。また、真っ赤や真っ黒の言葉通りの口形や最後の母音の口形、または色の強いイメージに対する感嘆の表現として口形が「お〜!」となっている例も多く見られた。「評価」は選択した単語が「良い」「悪い」だったために、プラス概念の

表現全般に伴い易い感嘆詞の口形「オ」や「ア」とマイナス概念の表現に伴い易い「への字」の口形や「エ～!？」の口形が出たと考えられる。この場合のプラス概念は「良い」に限らず、美しい・美味しい・大きい・凄いなど、マイナス概念も同様に「悪い」だけではなく、小さい・遅い・つまらないなど幅広いものを包括する。それらの感情を代表するような「良い」と「悪い」に「口・舌」の表現が多く表れたものと考える。

### 7.3 形容詞の種類と「動きの変化」

次に動きの変化についても、形容詞の種類によって違いがあるかどうかをみる。表12の下段の合計は、表9に対応している。ここでも、一つの形容詞に複数の項目が使用された場合はそれぞれをカウントしている。表中のパーセンテージは、形容詞種類の総数に対する割合を示す。

表12 形容詞の種類別の「④動きの変化」の内訳

形容詞種類	加速		減速		増大		縮小		溜め		合計	
大小 (362)	57	15.7%	19	5.2%	189	52.2%	64	17.7%	49	13.5%	378	104.4%
感情 (30)	6	20.0%	2	6.7%	23	76.7%	2	6.7%	8	26.7%	41	136.7%
知覚 (20)	4	20.0%	2	10.0%	13	65.0%	1	5.0%	7	35.0%	27	135.0%
色 (22)	1	4.5%	1	4.5%	2	9.1%	1	4.5%	3	13.6%	8	36.4%
性格 (20)	0	0.0%	0	0.0%	8	40.0%	0	0.0%	14	70.0%	22	110.0%
評価 (20)	4	20.0%	1	5.0%	14	70.0%	1	5.0%	8	40.0%	28	140.0%
合計 (474)	72	15.2%	25	5.3%	249	52.5%	69	14.6%	89	18.8%	504	106.3%

全体的にどの項目も満遍なく使用が認められる。特に割合が高いのは、大小・感情・知覚・評価では「増大」であり、色・性格では「溜め」であった。「動きを大きくする」ということが強調表現としては基本的であると言える。色・性格では動きを大きくすることもあるが、それよりも動きの開始時に「溜め」を作って、力を込めて表現していることを示すことで強調を行っている。「溜め」は感情・知覚・評価でも比較的高い割合を示している一方で、大小では割合が低い。「溜め」はどちらかという

と物理的なスケールではなく抽象的なスケールで有効に働く強調表現であると考えられる。ただし、感情・知覚・評価では、増大が最も用いられており、抽象的なスケールだからといって動きの大きさが使われないわけではない。この点については、選択した形容詞自体の影響も考えられる。また、そもそも「増大」と「溜め」は同類の動きの変化と見るべきなのかもしれない。

## 8. 大小形容詞の傾向

調査対象形容詞の大部分を占める「大小」を取り出して、程度の大きい単語と小さい単語を比較した。表13が全体の傾向、表14が「非手指表現」の内訳、表15が「動きの変化」の内訳である。まず大小形容詞の全体の傾向からみる。

表13 大小形容詞の全体の傾向

程度	付加単語あり				付加単語なし						合計	
	①とても		②「とても」以外		③非手指		④動きの変化		⑤別単語			
大	0	0.0%	68	10.0%	118	17.3%	142	20.8%	24	3.5%	352	51.6%
小	0	0.0%	87	12.8%	86	12.6%	131	19.2%	26	3.8%	330	48.4%
合計	0	0.0%	155	22.7%	204	29.9%	273	40.0%	50	7.3%	682	100.0%
区分計	155 22.7%				527		77.3%				682	100.0%

表13をみると、どの項目も程度大と程度小で、それほど大きな差はない。つまり程度が大きい単語も小さい単語も同程度に強調表現が用いられているということである。

次に非手指表現で、身体のどの部分が活用されているか、その内訳を見ていく。



表14 大小形容詞の「③非手指表現」の内訳

程度	目		口・舌		頬		頭		肩		上体		合計	
大	71	12.2%	88	15.1%	8	1.4%	19	3.3%	1	0.2%	21	3.6%	350	60.0%
小	43	7.4%	54	9.3%	3	0.5%	9	1.5%	23	3.9%	15	2.6%	233	40.0%
合計	114	19.6%	142	24.4%	11	1.9%	28	4.8%	24	4.1%	36	6.2%	583	100.0%

表14から、「目」や「口」は程度大の場合に、より出やすいことがわかる。逆に「肩」は程度小の場合に現れやすい。目や口は驚いたり、力んだりしたときに目を見開く、口を大きく開ける、尖らせる、真一文字に結ぶ、あるいは目を瞑るなど、多様な反応がある。程度の小さい時にも目を細めたりはするが、日常の反応としては数少ない。やはり大きな物事に対する反応として目や口の動きが出やすい。肩については程度小で「肩をすぼめる」行為はあるが、「肩を張る」あるいは「肩肘を張る」ということは、威勢がよさそうに見せることで、程度表現とは別物になる。肩を上げる行為も程度はマイナス方向に働く。よって、程度大に目や口、程度小に肩が多く出現したと考えられる。

最後に、形容詞の手話表現自体の動き方を変化させることで強調した例を、その変化ごとに大小の違いをみる。

表15 大小形容詞の「④動きの変化」の内訳

程度	加速		減速		増大		縮小		溜め		合計	
大	30	7.9%	8	2.1%	134	35.4%	1	0.3%	33	8.7%	206	54.5%
小	27	7.1%	11	2.9%	55	14.6%	63	16.7%	16	4.2%	172	45.5%
合計	57	15.1%	19	5.0%	189	50.0%	64	16.9%	49	13.0%	378	100.0%

表15をみると、動き方の「加速」「減速」は、程度大と程度小にあまり差がない。動きのスピードを変化させることは、手話において程度の大小にかかわらず強調するための手法であると言える。一般に程度を大きくするときに加速されるイメージがありそうだが、手話の場合、強調の度合いが相当程度に高い場合、逆にスピードが落ちることがある。ただこの場合、速度は落ちていても表現が縮小したとは言えない。例えば「遠

い」「(値段が) 高い」「(高さが) 高い」など、程度は増大しているが動きが緩まっている例が見られた。その場合は動きに力が込められスピードが遅くなることで重厚感を伴った表現となり、程度を高める役割を果たしていると考えられる。逆に程度が小で動きが減速している場合は力の入らない軽い動きになっていた。

一方、動きの「増大」と「縮小」では、単語の程度大と小の格差の違いに特徴が表れている。「増大」の程度「大」は35.4%に対して「小」は14.6%であった。反対に「縮小」は程度「小」16.7%に対し「大」は0.3%であった。程度の大きいものをより大きくするときには動きは大きくなり、小さくなることはあまりなく、縮小の数字に現れている。反対に小さいものをより小さく表現するには限度があり、より強調しようとするゆえに動きが大きくなることもある。それは程度「大」の「増大」が35.4%なのに対して「小」の「縮小」が16.7%であるところに現れている。35.4%の中には「小」をより強調した例も含まれていることが読み取れる。「遅い」などがその例である。総体的に物事を伝えるには大きい表現の方が伝えやすい、より表しやすいのではないか。また「溜め」は力が入るためか比較的「大」に出やすいが「大」にしても「小」にしても強調したい意思が力を込める動きに繋がっていると考えられる。

## 9. まとめ

日本語形容詞に程度副詞の「とても」を付加した場合の、手話の程度表現を見てきた。調査から見えてきたものを挙げてみる。

◇程度副詞相当の単語が付加されることは少なく、付加単語がなく形容詞の元の形が保持されたまま「非手指」や「動きの変化」によって表現することが多い。

◇程度副詞を付加する場合、「とても」を付加して強調することはごく稀である。唯一現れるのは色の形容詞の場合であった。

◇「とても」以外の強調副詞に相当する単語がいくつかある。中でも「パ

クパク」「すごい」「オーバー」はさまざまな形容詞の程度強調に用いることができる。程度強調副詞相当の単語は基本的に形容詞の後ろにつく。また、「ジャンボ」「パクパク」は地域性のある単語であることがわかった。

◇「非手指」では「目」「口・舌」が最も多く使われ、その他に「頬」「頭」「肩」「上体」を動かす場合もある。「目」「口・舌」は大小・感情・知覚・色・性格・評価の全ての形容詞の種類で用いられ、程度大の場合も程度小の場合も表される。

◇「動きの変化」では、「増大」が最も多く用いられ、全ての形容詞の種類で用いられる。色・性格では「溜め」が特徴的に現れる。「加速」「減速」はどちらも程度大でも程度小でも用いられるが、「増大」は程度大に、「縮小」は程度小に用いられる。

以上のようなことが見えてきた。日本語のように「副詞＋形容詞」の複数語にならない場合が多かった。

形容詞に「とても」を付けた意味の手話を考えるとき、程度が大きくなる時には比較的スムーズに表現が出てくるが、程度が小さくなる時には表現に戸惑う人が多かった。手話において、程度小に「とても」を付加することが違和感を生ずるのか。元々大小の形容詞には程度性が含まれているので、更に程度を増強する「とても」が付くことが不自然なのかと思えた。

特筆すべきは手話の「とても」を付加した例の全てが色に集中していたことである。また「溜め」についても軽視できないものとする。溜めによってその後の単語の表現がより強調されることが見えてきた。

神田(2008)は「これまで「強調」機能とされてきたNMSは文法標識ではなく、ジェスチャーだと見ることもできる。」(p82)と述べている。しかし、調査に当たって形容詞を強調するために、強調単語を付加するより非手指表現を伴うことの方が多かった。例えば強調単語を付加しても、なお且つ非手指表現が付いてくる。この結果からNMSはジェスチャーと

みるのではなく、やはり「強調」機能を有していると考える。少なくとも日本語の程度副詞「とても」の役割を果たしている。神田(2008)では「学問の潮流は時として振り子のように正反対に動くことが多い。」(p77)とも述べている。今回の調査結果がどちらかへの振りだったとしても、非手指表現が文法に大きく関わり、動きの大きさの変化も含めて程度副詞の「とても」を担うことを確認した。

ただし、今回の調査では、具体的な一つ一つの動きが具体的にどのような役割を果たしているのか(例えば、「目を瞑る」という動きがどのような程度強調となっているか)といった細かな点は記述できなかった。非手指表現の体系的な説明のためには、一つ一つの動きを詳細に記述しておく必要があるだろう。

言語としての研究の歴史はまだまだ浅い手話である。品詞分類、量語形に大きな関心を寄せている。非手指表現を非手指標識(NMM: non-manual markers)や非手指動作(NMS: Non-Manual Signals)として研究を進めている方々がある。一つ一つを細かく研究すると膨大なものになると思われる。しかしそれがまとめられ、簡潔に説明されたなら、手話を言語として学ぶ聴者にとっては福音となる。多くの研究者の成果を待ちたい。

#### 【注記】

- (注1) 障害児を一般の児童と一緒に教育すること。統合教育。
- (注2) 補聴器での装用効果が不十分な場合、手術で装着する。手術で埋め込まれた内部装置と体外に装着する外部装置とでできている。外部からの音の振動を電気信号に変換する蝸牛に直接電極を埋め込み、聴神経に伝える。手術後、聞き分ける訓練を必要とする。

#### 【参考文献】

- 『日本形容詞辞典』日本文芸社
- 『広辞苑』(第六版)岩波書店

- 市田泰弘・江藤雄二（2000）「非手指副詞と強弱表現」日本手話学会『日本手話学会第26回大会予稿集』 pp.16-17
- 神田和幸（2008）「日本手話におけるNMSの機能」中京大学国際教養学部論叢編集委員会(編)『国際教養学部論叢』1(1)(通号) pp.77-85
- 神田、原、神谷、木村、片岡（2003）「手話における文法、感情、意図の可視化」『可視化情報』Vol. 23 Suppl. No. 1
- 菊澤律子（2015）「『手話は言語である』の一步先へ」『民博通信』No. 141
- 木村晴美・市田泰弘（1993）「日本手話における非手指動作(2)副詞的用法」日本手話学会『日本手話学会第19回大会予稿集』 pp.16-17
- 工藤 浩（2016）『副詞と文』ひつじ書房
- 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 松岡和美（2015）『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』くろしお出版
- 八亀裕美（2008）『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院
- 米川明彦（1984）『手話言語の記述的研究』明治書院